フィールド（現場）からの風 ⑭

宮田守男

二十四節気では、6日から20日までが「立夏」、さらに3つに分けた七十二候では、まず初候が「蛙始鳴（かわずはじめ）」で、近くでは蛙の合唱が聞こえてくる頃だ。しかし5月連休からは、家族そろって水田の準備をする機会が多い白馬村松川以北の水田に、農作業の姿が今年は極端に少ない。肥料等の高騰と農作業従事者の確保困難が理由との情報が聞こえてくる。地域の担い手農家が対応するには限界があることも事実だ。水面（みなも）に映る山岳美や蛙の合唱の楽しみが、本年は期待できないだろうと寂しく感じてしまう。

ことばの歳時記で国語学者の金田一晴彦さんが、5月の古名「サツキ」の語源について「田の神の月」の意味に違いないと述べている。サの語源がサオリなどの神に関係するものに使われているからだと。辞書でもサオリは田植えを始める日の祝いとある。豊かな耕作地の継続は農家だけでは対応できない農業事情の今だからこそ、田の神が宿るだろう風景を残す知恵を地域全体の課題として捉えてほしい。

豊かな耕作地の継続を

連休は、各地で賑やかさを取り戻しているが、タクシードライバーの人材確保が難しかったのか、宿から外食するための交通手段が取れなかったとの情報や、旅行会社の情報では、「観光バス運転手の労働時間と休憩時間での改善基準により、交通渋滞が懸念される地域へは今後旅行企画は大変難しくなってしまい観光企画の内容を吟味しなくては」と厳しい声が。観光バスを利用して広域で観光する企画から、地域内で観光ニーズを作り出す取り組みが今以上に求められていくだろう。

世界一の富豪、イーロン・マスクが米短文サイトのツイッターに「出生率が死亡率を超すような変化がなければ、日本がやがて存続しなくなる。世界にとって大きな損失だ」との投稿があったほど、衰退する経済大国の日本を危惧したことは記憶に新しいが、日本消滅意識は当事者の日本人には身に染みていない。森川友義さんの著書「一目惚れの科学」では、「確率的には、1万人と知り合って初めて相思相愛になれる。1日に1人、新たな出会いがあるとして27年かかる計算だ」と。子育て環境が改善されれば、人口減少課題は解決するとの安易な考えを排除しなくては、との思いが強くなるばかりだ。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）

新緑の時期の林の散策、熊除けの鈴やラジオ携行で楽しもう